

# 座敷

フォト劇場 (17)

写真が生まるものがたり

祖父のゐし越の商家の奥座敷「よう来たのう」と  
頭を撫でられき  
松尾祥子

幼い頃は毎夏、母の実家に親戚皆が集まった。奥座敷に居る祖父に挨拶するのは、ちよつとドキドキした。祖父は必ず、「誰の子だい？」と聞きながら、数珠で頭を撫でてくれた。私は二十七人目の孫であった。

さまざまな色の思ひ出閉ぢ込めて寝釈迦のやうに  
座敷しづもる  
藤岡成子

写真を見るやいなや、懐かしさがこみ上げてきた。今は亡き夫の仕事仲間、また、四人の義姉の一家が一同に集い、食べて飲んで歌って、楽しい時をともに過ごした。まるで昨日のことのように思い出される。



奥座敷のへはなよめごりようの姉さまのおゆび  
は細くただ白かりき  
榛葉貞代

敗戦から間なしの昭和二十二年姉の結婚式は  
自宅で行われた。物不足で花嫁衣裳は黒留袖  
と角隠しだけだったが奥座敷に座るお姉ちゃ  
んはとても綺麗だった。幼い私は襖の陰から  
お姉ちゃんの白い指先だけを見つめていた。

戦死した写真の叔父が生きてまだ座敷の奥の暗や  
みに棲む  
黒石 孝

母の実家の暗い座敷の奥に若い水兵の写真が  
飾ってある。母は志願して戦死したこの弟を  
語る時、必ず「バカだ」と言って悲しそうな  
顔をしたものだ。ずっと忘れられない。あの  
じつとりとした暗闇の匂いが嫌いである。